院長に聞く

岡山協立病院　角南　和治　院長

切れ目ない医療ネットの要に

岡山協立病院（岡山市中区赤坂本町）は、1960（昭和35）年のオープン以来、「患者の立場に立った地域の第一線医療」を理念に掲げ、急性期から慢性期まで多機能の医療を提供している。角南和治院長(62)は高度急性期を担う病院と地域の診療所をつなぐ医療ネットワークの要として柔軟に患者に寄り添う姿勢を強調する。（二羽俊次）

◇

―岡山県南東部医療圏における貴院の位置付け、役割をどのように捉えていますか。

岡山市を中心とする県南東部は大学病院をはじめとする公的病院や、循環器、脳神経、運動器などの専門病院が複数あり急性期医療が充実している一方、回復期の病床が不足している地域です。

当院は急性期から慢性期、在宅まで切れ目のないサービスを提供しています。急性期、回復期リハビリ、地域包括ケア、緩和ケアなど多様な病棟を有し、地域密着型多機能病院として、高度急性期を担う病院と地域の診療所をつなぐ医療ネットワークの要の役割を担っています。

―医療機関が近隣に多数ある中、貴院の特色はどんな点にありますか。

「いのちの平等」を基本理念としており差額ベッド代を徴収していません。訪問リハビリに力を入れていることや、歯科による口腔ケアを行っていることも大きな特長です。受診が中断したり普段の生活が気がかりだったりする方に対しては看護師らが自宅を訪問しています。再受診や訪問看護、訪問介護などのサービスにつなげることもあります。

また、院内に「なんでも相談窓口」というコーナーを設け、専任看護師と医療ソーシャルワーカーが治療はもちろん、医療費の支払い、療養生活の困りごとなど、あらゆる相談に応じています。

―地域とのつながりを重視されています。

リハビリが困難とされる重度の疾患や複数の疾患のある患者さんも積極的に受け入れています。その結果、他院からの紹介件数が大幅に増えています。2023年は3660件と10年間で25％増え、この間の紹介率は9ポイント伸び31・4％です。「協立に頼めば受け入れてくれる」「病状に応じて適切につないでくれる」といった安心感を持っていただいているのだと実感しています。

―総合診療科を開設している意義を教えてください。

患者さんの病気だけを診るのではなく、心理的、社会的背景まで含めた全人的医療を実践するのが目的です。複数の疾患のある高齢者が増える中、従来の専門分化された内科や外科だけではカバーしきれないケースにも適切に対応できます。18年に医師2人で立ち上げましたが、現在は13人と岡山県内でもトップクラスの手厚さです。

―長年、内科診療に力を注いでこられました。

消化器、呼吸器、循環器、糖尿病、感染症、腎臓・透析など各領域で専門性を備えた医師が在籍しています。特に消化器内科では昨年、専門医が新たに着任して体制が強化され、内視鏡センターでの治療や健診の件数も増えています。血管造影室や透析センターなど高度な医療供給体制を充実させるとともに、安全に集中治療が必要な重症患者さんの受け入れができるよう麻酔科や外科系専門科と連携しています。

―病院をリニューアルする計画があると聞きます。

建物の規模や病床数などは検討中ですが、救急室や内視鏡センターを拡張し、救急、急性期の機能を大幅に強化します。フィットネスなどができる住民の健康づくりの拠点となるスペースも整備します。

―LGBTQ（性的少数者）に配慮した取り組みを進めていると聞きました。

全ての患者さんに公平で尊厳のある医療サービスを届けることを目指し、「にじのかけはしプロジェクト」と名付けて取り組んでいます。ジェンダーに関わらずどんな人でも使える「だれでもトイレ」を設置したり、職員の学習を支援したりしています。

―地域との防災訓練を昨年から行っています。

病院を円滑に運営するには地域の支えが不可欠です。病院だけで行う訓練に加え、南海トラフなどの大規模災害を想定し、昨年から地元町内会などと合同で始めました。今月下旬には2回目の訓練を予定しています。

―医師の研修、教育にも力を入れているそうですね。

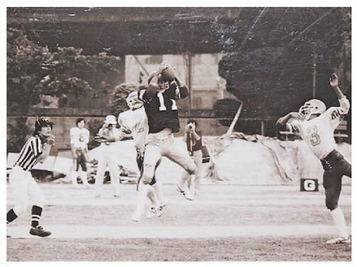
教育に関わる専任医師を配置し、初期研修医や専攻医の教育に病院を挙げて取り組んでいます。疑問があればすぐに相談できるきめ細かい指導体制や、訪問診療などを取り入れた全人的な教育が評価され、卒後臨床研修評価機構という外部からの審査で22年にエクセレント賞を受賞しました。現時点でも全国で27病院しか得られていない称号で、医学生から選ばれる病院に成長しています。

「全ての患者さんに公平で尊厳のある医療を届ける」と語る角南院長（中西弘之撮影）

患者からの悩みごとや疑問に応じる「なんでも相談窓口」

プロフィル

津山市出身。津山高では硬式野球部に所属した。大学進学後の経歴は異色。京都大工学部石油化学科に進み、アメリカンフットボール部に入った（**写真中央、黒のユニホーム**）。日本一も経験したが「選手としての壁を越えられなかった」と、4年生の時に裏方に回りチームを支えた。卒業後、香川医科大（現・香川大医学部）に進学。6年間、障害のある子どもたちへのボランティアに励んだ。



NPO救命おかやまのメンバーとして20年間、岡山県内各地に出向き心肺蘇生の講習を行う（**写真、後方中央**）。毎年参加してくれるバレーボールSVリーグ女子・岡山シーガルズの活躍に魅了され応援を続けている。

1992年から岡山協立病院に勤務。湘南鎌倉総合病院（神奈川）を経て、2002年に帰院。18年から副院長。今月、院長に就任した。日本内科学会総合内科専門医、日本循環器学会専門医、医学博士。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。